

# 「優しさ」という温かい貯金

西宮市教育委員会

人権教育室 指導主事 仲島 正教

## はじめに

「21世紀は人権の世紀」といわれスタートした2001年でしたが、国際的には同時多発テロ、アフガニスタン等の問題、また国内でも心が痛む事件が相次ぎました。今、あらためて「人権」について、みんなの心を合わせる必要があるのではないかと思います。

西宮市では現在「人権教育のための国連10年“西宮市行動計画”」をもとに「人権文化の花咲くまち西宮」をめざして、さまざまな取り組みが始まりましたが、私は「未来を担う子どもたちをどう育てるか」という観点で「人権」を考えてみたいと思います。

## 「優しい」という漢字の意味は？

私はこれまで21年間小学校教諭として、多くの子どもたちや保護者、地域の方々等と出会ってきました。その中でいろいろなことを学ばせてもらいましたが、ここでは、一人の校長先生とある子どもの言葉を紹介させてもらおうと思います。

その校長先生の名前は、幸田修一先生といいます。幸田先生は私に「仲島さん、“優しい”という漢字の意味を知っていますか？」とされました。私が「えっ？」と言うと「“優しい”という字は、イ（にんべん）に憂いと書くのだが、本当は憂いににんべんをつけるのだよ。なぜかというと憂いのある人の横に、にんべんつまり人が寄り添うことが“優しい”ということなんだ」と教えてくださったのです。この言葉は私の心にストンと落ちていきました。

後日、私は5年生にこの「優しい」の意味の授業を行いました。すると最後に朱 幸実（チュ チェシル）さんという在日韓国人の女の子が「先生、憂いの横に、人で、優しいというのはよくわかったけど、私には憂いという字は百と愛に見えるよ。憂いのある人には百の愛が必要なんだよ、きっと。先生、優しいという字は、人には百の愛があるという意味もあるんだと思うよ」と言ってくれたのです。この言葉も私の心の中に大きな音をたてて落ちていきました。

## 心の銀行にいっぱい温かい貯金を！

私は、子どもの心は「子ども銀行」だと思っています。子ども銀行に心の貯金がいっぱいある子は、これからの人生でしんどいことや辛いことがあってもその貯金を使いながら乗り越えていけるのではないかと思います。反対に子ども銀行に心の借金がいっぱいある子は、乗り越えることができずにしんどい思いをするのです。今さかんに話題になっている子どもの虐待は、借金の典型例です。虐待を受けることによって子どもの心は深く傷つき、大きな借金を抱えることとなります。それは10年ローン20年ローンになり、返済できないまま大人になり親になり、そしてローン返済のために、かつて自分が受けたよ

うに我が子への虐待を繰り返してしまうのです。虐待は繰り返されるといわれるのはこう  
いうことなのです。そんな借金を抱えた子どもも親も、温かい貯金をもらうことができれ  
ばきっと立ち直っていくはずです。ここにも優しい人の存在が不可欠なのです。

### お母さんお父さんから、子どもへの温かい貯金

最近夜遅くコンビニに行くと、ときどき親子連れに出会うことがあります。それもけっ  
こう小さな子どもがいる家族です。とっても仲良く見えます。たぶん親は子どもに愛情  
をたっぷりあたえているつもりなのでしょう。でも、これが小さい子に対する正しい愛情  
なのでしょう。私はこれは間違った愛情だと思っています。夜の11時に仲良くコンビ  
ニで買い物するのと、夜9時にふとんの中で、お母さんやお父さんと一緒に絵本を読みな  
がら目を閉じていく子どもと、どちらが本当の愛情なのでしょう。どこかの本に「子ど  
もの成長には正しい順番がある」と書かれていましたが、親がこの順番を間違えると、子  
どもにとっては、貯金ではなく借金をもらうことになるのでしょう。夜11時にコンビニ  
に行くのは、10年後でもけっして遅くはないのです。

小学校3年生の子で何度も何度も練習しても、なかなか“逆上がり”が出来ない子が  
いました。担任である私もあきらめかけた頃でした。そんなある夜、お母さんが、眠って  
いるその子の手（まめがいっぱいできていました）を握りしめて「出来なくてもこんなに一  
生懸命がんばっているあなたのことが、お母さんは大好きだよ」と話しかけたそうです。  
そのとき、その子は眠っていたのですが、それから2週間後、なんと“逆上がり”が  
出来るようになったのです。お母さんからきっと温かい貯金がその子に伝わったのでし  
ょう。

4年生の男の子の話です。1年ほど前に両親が離婚し、父と息子の2人暮らしでした。  
お父さんは一生懸命に働きました。遠足のお弁当もつくってくれました。風が冷たく感じ  
始めた11月のある日、私はクラスの子どもたちに「自分のこんなところが好き」を書い  
てごらんという、その子は「お父さんが好きな自分が好き」と書きました。その晩、私  
は家庭訪問をし、玄関先でお父さんにこのことを伝えました。お父さんはその場で大粒の  
涙を流されました。お父さんが一生懸命に我が子のために温かい貯金をあたえようと  
がんばっていたら、息子もちゃんとお父さんに温かい貯金をくれたのです。こんな温かい父  
子関係が、私の心にも貯金をくれました。

### つながりと感動は、一生の宝物 「一人の喜びは、みんなの喜び」

子どもたちは学校生活の中でいろいろな出来事に会います。それはうまくいくことば  
かりではありません。むしろうまくいかないことの方が多いいくらいです。でもそんな時  
こそ、人と人の中には“つながりと感動”が生まれるのです。

体育の時間のことです。「忍者のようにくるりと回る工夫をしよう」ということで、4  
年生の子どもたちは、体育館にマットや跳び箱などを自分たちで考えて並べていました。  
くるりと回る技ということで、前転系、後転系の技や側転などいろいろと挑戦してしま  
したが、この日は、いわゆる台上前転に子どもたちの関心が集まっていました。みんな  
で教え合ったりしながら授業は進んでいきました。そして4時間目終了のチャイムが鳴  
りました。その後の様子を学級通信に書きました。

・・・・・・でも森原さんは、まだ出来ずにいました、怖さがじゃまをしてなかなか足を振り上げられないのです。でもそこにもちゃんと友だちがついていてくれました。そんな姿を見て、私は「ここまでがんばっているのだから、できなくてもいい。今日無理しなくてもいつか出来るだろう」と思って、終わりの合図をしました。マット、跳び箱を片付け、みんなは給食の用意に行きました。が、森原さんを含め5人の子が残っているのです。「先生、残ってもう少し練習していいですか？」ときくので「いいよ」と言い、しばらく私も様子を見ていました。すると自分たちでマットと跳び箱を出し、再び森原さんに教えはじめました。同じ高さに積んだマットなら出来るのに、跳び箱になると出来ないのです。そのうち、教室から心配して1人2人・・・・5人6人・・・・と友だちがやってきました。「ここに手をついたらいいよ」「思い切っていきー」「誰でも失敗はあるよ」「落ちそうになったら、ここで支えるから大丈夫！」などたくさん声がかかりました。教室にいた子もいつの間にか、全員が体育館に来ていました。給食も食わずに全員が体育館の森原さんの跳び箱の周りにいました。私はその様子だけで感動してしまいました。・・・・時計の針は12時50分を過ぎていました。その時、森原さんの足がフワリと浮き、体がフワリと跳び箱の上を回ったのです。同時に、その小さな輪の中から大きな拍手と、とってもいい笑顔が体育館中に広がっていきました。すばらしい光景でした。私は自分の頬を流れる涙を止めることが出来ませんでした。・・・・・・

(1997年12月11日 4年1組学級通信より)

私たち大人は、子どもたちがつまずき悩んでいると、すぐにそれをとってやろうとします。しかし、すぐにとらないで少し様子を見てみると、そのうち子どもたちは、必ず自分たちで動き始めるのです。子どもたちは大人が思っている以上に、本当は力を持っているのです。その力を出すまでの“間”が今、待てなくなっているのです。この“間”が子どもたちにあたえられれば、そこに仲間と空間が登場してきます。時間・仲間・空間、この3つの間が、子どもたちの心と体をつなぎ、人間として大きく成長させていくのです。

この体育の出来事の後、みんなの“優しさ”をもらった森原さんは「みんなにかこまれて出来たあのことは一生忘れない」と言い、周りにいた亀井さんは「一人の喜びは、みんなの喜びだ」と感想を熱く語ってくれました。この“つながりと感動”体験は、この子たちの一生の宝物になったことでしょう。

人間の生き方は、自分の体験に基づくといわれています。優しさや思いやりのある中で育った子は、大人になっても優しさや思いやりのある人になるといわれますし、反対に外見やうわさや点数、はやい遅い、上手下手そんなことばかり気にして育った子は、大人になってもそんなことを気にする人になるといわれます。ということは、子ども時代にどんな体験をするかがその子の一生を左右するといっても過言ではないのです。子ども時代に心の銀行に温かい貯金をいっぱい持てるようにしてやるのが大人の役目であるはずで

## 差別は、誰が作っているの？

差別というものは、いったい誰が作っているのでしょうか？子どもでしょうか？それは違います。差別はまちがいなく大人が子どもに伝えているのです。知らず知らずに伝えている人もいるでしょうし、それを承知の上でわざわざ伝えている人もいるでしょう。どちらにせよ、それは人権意識のひじょうに低い人と言わざるを得ません。ある同和問題の学習会で一人の中学生がこんな発言をしました。「なんでぼくら差別される側の人間が、差別に負けないためにこんなに勉強しないといけないのでしょうか。差別する側の人が勉強してくれたら差別はすぐなくなるのに・・・」と言いました。現在まで、学校や公民館等で、人権問題に関する学習や啓発は、長きにわたって実践されてきました。でも「差別はいけない」ことはわかっているのに「差別」はなかなかなくなるのです。それはうわべだけの理解だけで、生活にしっかり根づいていないからなのです。家庭で地域で学校で「人権という温かな貯金」が増えれば、子どもの人権意識は高まり、人権感覚の身についた人間になっていきます。そのために大人こそ、しっかり勉強しないといけないのです。なぜなら、子どもはこれからの未来を担う社会の宝なのですから・・・。

### 「人権文化の花咲くまち」にするための 私の3つのまとめ

#### (1) キーワードは「優しい人」

人間は、優しくなると自分を好きになります。そして人も好きになります。

人間は、優しくされると人を好きになります。そして自分も好きになります。

#### (2) 合い言葉は「つながりと感動」

親子のつながり、仲間とのつながり、自然とのつながり。そんなつながりが自分を豊かにし、感動の心を育てます。感動は一生の宝物になる貯金です。

#### (3) 実践は「出会い」「気づき」「広がり」

学習の第一歩は「出会い」です。「出会い」によって「気づき」が生まれてきます。そして「気づき」によって、自分の考えや行動に「広がり」が出てきます。

そして、そこには人権文化が根づいていきます。

## おわりに

「憂いのある人には百の愛が必要だよ」「人には百の愛があるんだよ」と教えてくれた朱宰実(チュ チェシル)さんは、今大学生になり、みんなに優しさを分けてくれています。

私に「優しい」の意味を教えてくださいました幸田修一先生は、あの阪神大震災で帰らぬ人となりました。最期まで子どもたちの安否を気遣ってくださった校長先生は、今は天国からいつも私たちを見守り、元気づけてくださっています。

私たちに「優しさ」という温かい貯金を残して・・・。

2002年(平成14年)3月

西宮市「人権文化の花咲くまち 西宮をめざして 3」より